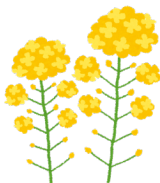




# JICA保健医療ニュースレター 「保健だより」第64号

2024年2月26日発行



## 今号のトピック グローバルヘルス合同大会2023

寒さも続きますが、少しずつ春の訪れを感じる季節になってきました♪

今月号では『グローバルヘルスの海へ 多様性を包摂する豊かさを求めて』と題したグローバルヘルス合同大会2023の中から、JICAが登壇した3つのトピックについて特集します！テーマは「プラネタリーヘルス」「保健政策とシステム」「アフリカにおける保健人材育成と日本の貢献」に関するシンポジウムやワークショップです。

他にも、Africa CDCとの共催イベント、長期研修員、ウクライナ・モルドバ保健省次官来日、セネガルNDCs、ザンビアのコレラ対応等盛りだくさんのニュースを掲載しました。ぜひご覧ください！

### 目次

- ◆ グローバルヘルス合同大会の報告 1
  - ・ プラネタリーヘルス(地球の健康)と栄養について
  - ・ アフリカ三カ国の研究者らが日本を訪問、公衆衛生・感染症について日本・JICAと連携を強化 2
  - ・ シンポジウム「グローバルヘルスにおける保健政策・システム研究のスコープと手法ーその国際潮流」 3
- ◆ 第3回アフリカ公衆衛生学会：アフリカCDC・JICA共催イベント開催報告
- ◆ 北海道大学における第1回JICA長期研修員プログラ“PREPARE”国際シンポジウム開催 4
- ◆ ウクライナの復興のために～日本の被災地からの学び
- ◆ 海外OJT体験記 5
- ◆ アフリカ初！セネガルでの非感染性疾患対策強化プロジェクト
- ◆ ザンビアにおけるコレラアウトブレイクへの対応 6
- ◆ 保健グループ What’s Up 7
- ◆ ゆくひとくるひと
- ◆ 編集後記

## グローバルヘルス合同大会の報告

2023年11月24日～26日まで東京大学本郷キャンパスにてグローバルヘルス合同大会2023が開催されました。日本熱帯医学会・日本国際保健医療学会・日本渡航医学会・日本臨床医学会の4学会合同で、『グローバルヘルスの海へ 多様性を包摂する豊かさを求めて』を掲げての各種発表でした。また、合同大会ならではの特別合同企画や共催シンポジウム等もありました。JICAからは、プラネタリーヘルスとアフリカにおける保健人材育成の2つのワークショップと、グローバルヘルスにおける保健政策・システムのシンポジウムに企画・登壇しています。JICAが登壇したシンポジウムとワークショップについてご紹介致します。



### プラネタリーヘルス(地球の健康)と栄養についてワークショップを開催しました！

グローバルヘルス合同大会2023において、JICA・長崎大学の共催でワークショップ「プラネタリーヘルスの使い方」を企画・実施しました。

プラネタリーヘルスは、20世紀以後の人口構造の変化やグローバルな経済活動による自然破壊などによって、温暖化や異常気象等の変化が生じ、生態系の恒常性が破壊され、人間の健康と社会の存続が脅かされていることに警鐘を鳴らす新たな概念として近年注目されており、具体的な取り組みの必要性が高まっています。

本ワークショップでは、研究、実践、アドボカシーに関わるスピーカーに登壇いただき、プラネタリーヘルスの概念とグローバルヘルスとの関わりや具体的な取り組みの方法について、約65名の参加者とともに議論しました。JICAからは小澤真紀課長(人間開発部保健第二グループ保健第三チーム)が



当日は数多くの参加があり、プラネタリーヘルスへの高い関心が伺えた。

座長を務めたほか、野村真利香国際協力専門員が登壇し、「地球も人間も健康になる食べ方とは」と題し、健康的な食事(Healthy Diet)で地球の健康と人間の健康の両方にアプローチすることや、マルチプレーヤーで取り組むこと、複数の栄養不良形態への同時効果的な栄養政策・介入の必要性に言及しました。また渡辺知保教授(長崎大学ブラ

ネタリーヘルス学環)は、グローバルヘルスを含む人間の全ての活動は、地球の限界(プラネタリー・バウンダリー)との関連を明確化しつつ行うことが重要であると強調しました。また昔宣希准教授(同学環)は、プラネタリーヘルスの行動実践を促進する政策手法の一つとしてカーボンプライシングの理論と近年の研究動向について紹介しました。さらに菅原丈二氏(日本医療政策機構)からは、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)におけるヘルスシステム強化の観点において、近年では異常気象への対応や地球環境に与える負荷の軽減が求められていることが言及されました。また同氏より、理論的なフレームワークとして、気候変動に強く低炭素な保健医療システム構築のための世界保健機関(WHO)枠組みの紹介がされたほか、具体的な取り組みとして「気候変動

と健康に関する変革的行動のためのアライアンス(ATACH)」や「グローバル・グリーン・アンド・ヘルシー・ホスピタルズ(GGHH)」の事例が紹介されました。

全体議論では、環境とグローバルヘルスシステムのつながりを広い視点で理解し、中長期的な影響を踏まえ、他の分野にも関心を持ち身近にできることから取り組んでいくことの重要性、そのためにプラネタリーヘルスという共通概念で目線合わせする必要性が提案されるなど、登壇者と会場が一体となった活発な議論が展開されました。

2024年11月18日～22日には長崎でThe 8th Global Symposium on Health Systems Research 2024(HSR2024)が開催予定です。次回の会議の場で、より進んだ議論の展開を予定しています。(保健第三チーム 松尾)



発表後のディスカッションの様子。登壇者および参加者の間で活発な議論が交わされた。



## アフリカ三カ国の研究者らが日本を訪問、公衆衛生・感染症について日本・JICAと連携を強化

グローバルヘルス合同大会2023に参加するため、11月下旬にガーナ・野口記念医学研究所(以下、野口研)ドロシー所長、ケニア・中央医学研究所(以下、KEMRI)ソングック所長他研究者、コンゴ民主共和国・国立生物医学研究所の研究者らが日本を訪問。学会やセミナーへの参加、国内関係機関の訪問を通じて、公衆衛生・感染症に関するJICA・日本との連携強化について協議しました。このようにアフリカ各国の研究所所長らが日本で一堂に会するのは貴重なことで、非常に活気のある1週間となりました。

3ヶ国の研究者らは「Human Capacity Development for Health Research in Africa and Japan's Contribution」をテーマに登壇し、各研究所が持つ機能や強み、地域における研究所の役割について講演を行いました。

また、International AIDS Vaccine Initiativeと国立感染症研究所共催のワクチンをテーマとしたセミナーにも参加。KEMRIソングック所長、野口研ドロシー所長の二人が登壇し、両研究所の地域における役割や、今後アフリカにおけるワクチン製造やその研究開発に関わることへの意思表示がなされた他、新たなパンデミックに備え



セミナーに登壇する野口研ドロシー所長とKEMRIソングック所長

ることの重要性と各国政府・国際機関を巻き込んだ協働の必要性を訴えました。

JICA本部においては、野口研ドロシー所長、ガーナ国立ワクチン研究所CEO・アンボフォ氏(元野口研ウイルス部部长)、国立感染症研究所石川主任研究官をお招きし、座談会を開きました(JICAマガジン2月号に掲載)。座談会では、野口研とも関係の深い人間開発部小澤課長と共に、JICAと野口研、ひいてはガーナに対する今後の保健分野の支援について熱く語っていただきました。長崎大学や東京医科歯科大学等、様々な日本の大学でも学んだ経験があるお二人。ガーナや周辺国における研究者の教育の重要性のほか、今後自国でワクチンを開発していくことの意欲を示されていました。

(保健第二チーム 岡山)



国立感染症研究所を訪問し、今後の協力について意見交換を実施



JICAマガジンの座談会時の様子。和やかな雰囲気で行われた。(写真:奥山智明)





## シンポジウム「グローバルヘルスにおける保健政策・システム研究のスコープと手法－その国際潮流」

2023年11月24日にグローバルヘルス合同大会でシンポジウム「グローバルヘルスにおける保健政策・システム研究のスコープと手法－その国際潮流」が開催されました。このシンポジウムは2024年11月に開催予定の長崎大学、JICA共催イベント「[The 8th Global Symposium on Health Systems Research \(HSR2024\)](#)」に先駆け企画したものです。

シンポジウムでは、保健政策やシステムの研究にはどのような研究スコープがあり、何を目的にどのような手法やアプローチで行われているのか、全般・保健政策・保健財政・保健人材・医療製品のアクセス&デリバリーという5つの切り口から概要と事例が紹介されました。その中で、保健システムは複層的なレベルで機能して結果をもたらすため、それぞれのレベルから支援に取り組むことが重要であること、世界中の保健政策・システム研究の関係者が議論を深める意義が強調されました。

グローバルヘルス分野の研究者、実務家、学生など約200名の参加者たちがパネリストの発表に熱心に耳を傾け、質疑応答では研究対象者へのアプローチ方法や分析手法などについて様々な質問が寄せられました。本シンポジウムを通じ、日本初開催のHSR2024への期待の高まりが醸成されました。JICAは、HSR2024において保健システム強化を通じたグローバルヘルスへの貢献を発信するとともに、保健政策・システム研究の関係者との議論を深め、そのネットワークと知見を事業に活かせるよう努力していきます。

(緒方貞子平和開発研究所 人間開発領域 鈴木聡子)



シンポジウム登壇者



ディスカッションの様子

**日本初開催!** hsr 2024  
EIGHTH GLOBAL SYMPOSIUM ON HEALTH SYSTEMS RESEARCH  
WASAGAMI, JAPAN 札幌

テーマ Building Just and Sustainable Health Systems: Centering People and Protecting the Planet

保健政策・保健システム研究分野の世界最大のシンポジウム

2024  
11/18(月) - 22(金) 会場: 出島メッセ長崎(長崎市)

演題募集! 締切 演題応募は  
企業セッション 2024 1/30 (水) こちらから!  
Organized session  
個人発表 2024 3/20 (水)  
Individual session  
能力強化セッション 2024 4/1 (月) 登録費無料・出席  
Capacity building session HSR2024

主催 Health Systems Global  
協賛者 国立国際医療研究センター(NIGMS)、長崎大学、国際ロータリー、世界保健機関(WHO)健康政策総合研究センター、日本国際保健センター(JICHS)、GAP(グローバルヘルス・アクセシビリティ・パートナーシップ)、日本国際保健協会(JIHA)、日本国際保健推進委員会、日本国際保健推進基金、JICA、長崎国際観光コンベンション協会

お問い合わせ 長崎大学大学院保健学専攻・グローバルヘルス研究科 Tel: 095-819-7549 (担当: 緒方、鈴木) Email: hsr\_2024@nigam.ac.jp

HSR2024演題募集ポスター

## 第3回アフリカ公衆衛生学会：アフリカCDC・JICA共催イベント開催報告

2023年11月27-30日にアフリカ疾病予防管理センター(以下、アフリカCDC)が主催する第3回アフリカ公衆衛生学会(通称CPHIA)がザンビア・ルサカで開催されました。今年はBreaking Barrier; Repositioning Africa in the Global Health Architectureというテーマで世界90か国から約5,100人が現地参加、サイドイベントも対面97件、オンライン33件が開催され、前回開催時と比較し多くの参加が見られ、アフリカの公衆衛生への関心や認知度の高さが表れていました。

今回は初の試みとしてアフリカCDC・JICAの共催サイドイベント、「Pathways for strengthening laboratory workforce in Africa: lessons learned and the way forward」を企画開催しました。各国JICA関係者からの協力と、アフリカCDCの予算支援も受け、JICAが推進する「健康危機対応能力強化に向けたグローバル感染症対策人材育成・ネットワーク強化(通称

PREPARE)」の重要なカウンターパート機関である、ガーナ野口記念医学研究所、ナイジェリア疾病予防センター、ケニア中央医学研究所、コンゴ民主共和国国立生物医学研究所、ザンビア国家公衆衛生院ならびにザンビア大学獣医学部から関係者に登壇いただき、アフリカCDCと共にアフリカにおける臨床検査人材育成についての知見や課題の共有、今後の展望などについて、発表とパネルディスカッションを行い、活発な意見交換の場となりました。また、サイドイベント前後に、関係者がざっくばらんに意見交換することもでき、国を超えて対面で集うことの意義を再認識する機会となりました。

今後もアフリカCDCの公衆衛生研究機関ネットワークとJICAのPREPAREネットワークを繋ぎ、ひいてはアフリカ大陸全体の感染症対策に寄与する活動を計画実施していきたいと考えています。

(エチオピア事務所 アフリカCDC連携企画調査員 齋藤絹子)



アフリカCDCならびにPREPAREカウンターパート機関からの登壇者



## 北海道大学における第1回JICA長期研修員プログラム “PREPARE”国際シンポジウム開催

JICAでは、「健康危機対応能力強化に向けたグローバル感染症対策人材育成・ネットワーク強化(PREPARE)」の柱の一つである感染症対策人材の育成として、長期研修員受入を実施しています。ザンビア・ガーナ・コンゴ民主共和国・ケニア・ナイジェリア・ガボン・タイ・インドネシア・フィリピン・ベトナムの10ヶ国からの長期研修員は北海道大学と長崎大学の博士/修士課程で学位取得を目指すプログラムや、北海道大学の人獣共通感染症グローバルエキスパート養成プログラム(Global Zoonosis Control Expert(GZCE) 認定コース<sup>1)</sup>)で研究しています。

2023年12月19日(火)に北海道大学で第1回JICA“PREPARE”プログラムに関する国際シンポジウムが開催されました。北海道大学で実施している教育プログラムの成果



Chizimu Yamweka Joseph研修員(左)、Harvey Kakoma Kamboyi研修員(右)の発表

報告としてザンビア国に焦点をあて、JICA PREPARE長期研修員4名の報告と今後の展望についての議論が行われました。JICAからは緒方貞子平和開発研究所の瀧澤郁雄主席研究員が登壇しました。瀧澤主席研究員からは、1970年代に遡り「アフリカの医学研究基盤の強化」としてゼロから積み上げられてきた援助についての話、PREPARE長期研修員の概要等が紹介されました。その後、2023年まで在籍していた元JICA研修員のWalter Muleyaさん、Katendi Changulaさんがオンラインでご自身の研究内容やGZCEコースで学んだ利点等を発表しました。会場では現在GZCEコースに在籍しているJICA研修員Chizimu Yamweka Josephさんが薬剤耐性について、博士課程に在籍しているHarvey Kakoma Kamboyiさんはバチルス属細菌の分子・遺伝子解析等ご自身の研究について紹介し、プログラムの利点・提言・今後の展開について等を発表しました。

修士生のお二人は国際的な共同研究が実施できたこと、技術力の向上について話しており、個々の研究能力向上だけでなく国際的なネットワークづくりの面でも貢献できたようです。また、研修員が学んだ研究を活かし活躍している話も聞くことができました。

続くパネルでは、長崎大学の金子先生や北海道大学の鈴木先生も参加し、いかにしてアフリカの医学研究強化に貢献していくことが



瀧澤主席研究員の登壇



登壇者等によるディスカッション

1. 北海道大学の感染症対策人材育成のプログラムの一つ。GZCEは博士号取得者を対象として、総合的な国際感染症対策の策定や実施が可能な人材を人獣共通感染症対策専門特論受講・国内外の機関との研究・実習等を通して養成・育成するプログラム。

## ウクライナの復興のために～日本の被災地からの学び

2023年11月、日本の災害医療に関する体制や取り組みを学ぶため、ウクライナの保健省・災害医療センター・WHOウクライナオフィスより、Kuzin Ihor(クズイン・イホル)次官を含む11名が来日し、東京・大阪・兵庫を訪れました。

ウクライナでは2022年2月に始まったロシアの軍事侵攻による被害のため、非常態下で医療活動にあたるウクライナ災害医療センターの機能強化が急がれています。この来日の目的は、阪神・淡路大震災の被災地である神戸で行われた災害派遣医療チームDMAT<sup>1)</sup>の訓練を視察し、同センターの体制強化に生かすことです。訓練では、豪雨災害と内陸型地震が同時発生したというシナリオにて、DMAT・自治体・医療施設・保健所・公共交通機関より総勢500人の参加のもと、重傷者の救命のシミュレーションが行われま

した。また、東京では、日本医科大付属病院等の災害時の拠点病院を訪問し、緊急時の医療体制や患者の搬送方法、被災情報の収集やデータの活用などの説明を受けた他、被災者や患者のメンタルヘルスクアを担う災害派遣精神医療チームDPATの活動を学びました。

保健省のクズイン次官からは「大きな被害を受けているウクライナの戦地と日本の被災地は似ているとも言え、日本の強靱な災害医療体制は大きな学び」との言葉を頂きました。大きな災害を経験し、その度に対策を強化してきた日本には、災害医療や緊急医療についての多くの知見があります。ウクライナの災害・緊急医療を担う方々の熱い思いを感じ、今回の視察が今後のウクライナの緊急医療体制の強化につながることを期待し、今後も同分野での協力を進める計画です。(保健一チーム 加納)



1. Disaster Management Assistance Teamの略称。医師・看護師・調整員で構成される専門的な訓練を受けた医療チームで、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場で、発生直後から活動できる機動性を有した組織。

できるかについて活発に議論が行われました。研修員たちはそれぞれ自身の分野で貢献できることを話し、次世代の人材育成に引き続き力をいれて貢献していくべきことや、WHO等が進める国際的な取り組みとの調和化も含めてプログラムの一層の認知度向上に努めるべき等の意見ができました。

本シンポジウムは、長期研修員の研究を身近に

分かりやすく具体的に知るよい機会となり、また研修を通じた研究者の国際的な人的ネットワーク構築の重要性を再認識することができました。

今後も長期研修員の方々が日本で研究し、帰国後それぞれの国で研修を活かして下さることを願って、北海道大学・長崎大学と共に取り組んでいきたいと思います。(保健第一グループ グローバルヘルスチーム 佐藤恵子)



JICAの人材育成制度の一つ、新入職員が開発途上国に数か月滞在するOn-the-Job Training(OJT)の一環として、ウガンダに3か月間滞在しました。

ウガンダでは保健指標の改善に向けた様々な取組が行われていますが、病院における組織的な能力不足や医療器材管理の不備等の課題があり、保健医療サービスの質の向上が急務となっています。そこで、JICAは技術協力「5S-CQI-TQMを通じた患者安全構築プロジェクト」を全国の18病院を対象に実施し、5Sやカイゼン手法<sup>2</sup>を活用した患者安全に関する知見の共有や、病院安全レポートシステムの導入を行っています。今回のOJTでは、同プロジェクトの現場を視察しました。

視察した病院の中には首都から約9時間の車移動が必要な場所もあり、病院毎に状況が大きく異なりました。5Sやカイゼン活動に特化したチームを配置し院内の活動を推進している病院もあれば、スタッフが多忙でそれらに手が回っていない病院もありました。5Sやカイゼンは職場環境を改善し、作業の効率化だけでなく、院内感染や医療事故の予防にも寄与します。しかし、活動の意味を理解せずに取り組むことは、日々



ユンベ病院にて行った5S研修の様子



5Sが行き届いたカコンガ病院の病棟薬在庫の様子

の医療現場で忙しいスタッフにとって負担となりかねません。今回の現場視察を通じ、「何故やるのか」、「何を指すのか」を確認した上で、病院全体が一つのチームとなって取り組むことこそが、患者安全文化の構築に繋がると実感しました。

また、この考え方は、どんな事業にも共通していると感じます。JICAの協力は、日本が一方的に押し付けるものではなく、相手国と共に「何故やるのか」「何を指すのか」を考え、必要な協力を検討することが求められます。今後はOJTで得た知見を活かし、保健分野はもちろん、他の分野でも相手国の自助努力を継続的に支援していきたいと思えます。(保健一チーム 鈴木)



プロジェクト専門家が現地スタッフに指導する様子

1. 「5S(整理、整頓、清掃、清潔、しつけ)」、カイゼン、総合品質管理
2. カイゼン手法:ムリ・ムラ・ムダの低減



ジュルベル州の保健施設視察(血糖測定の様子)

WHOによれば、心血管疾患、糖尿病等の非感染性疾患(NCDs)によって世界全体の死亡者数の74%に相当する約4100万人が毎年亡くなっています。NCDsの多くは慢性疾患であり継続的な治療を必要とするため、患者自身の健康問題に留まらず、医療財政の観点でも喫緊の課題です。

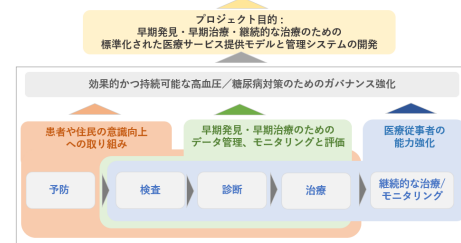
セネガルにおいては、JICAはこれまで母子保健や人材育成、医療保障などの取組を進めていましたが、近年顕著であるNCDs患者の増加に対応するために、NCDsの予防、早期発見・治療、継続的治療が可能な保健医療サービス提供モデルの構築が求められています。JICAは2023年6月より「非感染性疾患対策強化プロジェクト(通称アーロウチMNT)」の実施支援を開始しました。MNTはNCDsのフランス語の略称、「アーロウチ」はウォルフ語で「自分の身を守る」という意味で、セネガルの人々にメッセージが届くように命名されました。

本プロジェクトは、2023年5月に国家承認された「NCDs 対策加速化計画 2023-2025」に沿い、高血圧と糖尿病の対策に特化した活動を進めています。これまで、関係者との意見交換やベースライン調査を通じて実態とニーズを明らかにするとともに、大学や専門医、患者支援協会、他パートナー機関等と連携して医療従事者研修の準備等も行っています。幅広いアクターとの協力関係の他、JICAの他事業との相乗効果も本プロジェクトの強みです。

WHOによれば、心血管疾患、糖尿病等の非感染性疾患(NCDs)によって世界全体の死亡者数の74%に相当する約4100万人が毎年亡くなっています。NCDsの多くは慢性疾患であり継続的な治療を必要とするため、患者自身の健康問題に留まらず、医療財政の観点でも喫緊の課題です。

2023年12月には、「第2回NCDs予防とケア・シンポジウム」が開催され、NCDs対策に取り組む様々な関係者が勢揃いする場において、本プロジェクトのキックオフ・セレモニーが設けられ、参加者から多くの期待の声寄せられました。NCDs対策はセネガルで優先度の高い課題であり、その対策強化に貢献すべく活動を進めていきます。(保健二チーム 松本)

セネガル保健省の「NCDs対策加速化計画2023-2025」の実施を後押し



プロジェクト概要と「NCDs 対策加速化計画」の関係性



「第2回NCDs予防とケア・シンポジウム」の様子



ワークプラン策定ワークショップのインタビュー



## ザンビアにおけるコレラアウトブレイクへの対応

ザンビア政府は2023年10月18日にルサカ郡におけるコレラアウトブレイクを宣言しました。その後、コレラ症例は増え続けており、2024年1月21日時点でルサカ州では10,000例を超えるコレラ疑い・確定例、400例以上の死亡が報告されています。1月4日にはNational Heroes Stadiumにコレラ治療センターが開設され、各サブディストリクトのコレラ治療センターから患者が搬送され入院治療を受けています。現在、JICAはザンビアにおいて「ルサカ郡総合病院運営管理能力強化プロジェクト」と「感染症対策のためのラボサーベイランス強化プロジェクト」の2つの技術協力プロジェクトを実施しており、各プロジェクトの専門家がコレラアウトブレイクに対する支援を行っています。本ピックではアウトブレイクの最前線で活躍されている専門家の活動や現場の声をご紹介します。（保健第二チーム 黒部）



### ■ ルサカ郡総合病院運営管理能力強化プロジェクト

/法月正太郎チーフアドバイザー

私たちのプロジェクトでは、ルサカ郡の5つの病院において、モニタリングに基づいた問題解決能力の強化、感染症対策の強化、医薬品・消耗品のストック管理、及び対象5病院、ルサカ州保健局、ルサカ郡保健局及び保健省の連携強化を行うことにより、当該病院におけるサービスの質改善のための病院運営管理能力の強化を目指しています。

プロジェクトが活動する5つの病院は、ルサカのコンパウンドと呼ばれる人口が密集したスラムの真ん中にあります。そんな混雑する病院で2023年10月、コレラが発生しました。地域の人々がどんな暮らしをしているのかを知っているからこそ分かる危機感、人口が密集し、安全な水へのアクセスが悪く、雨が降れば洪水となりトイレから溢れる便で水源が汚染される状況、本格的な雨期

が始まった時には数多くの患者が発生することは明らかであり、我々は、危機感を持ち全力でコレラ対応を含む活動を行ってきました。

しかし、残念なことに地域の人々は、ステイグマ(社会的偏見)があり、下痢であっても病院には行きたがらず、コミュニティで死んでいきます。濃厚接触者調査で訪れた家には、毛布に包まれた12歳の女の子の遺体がありました。なぜ人々は病院に行かないのか、人々は正確な知識がなく、首都のルサカであっても洪水で道が悪く徒歩で病院に辿り着けません。この人々を救うにはどうしたら良いのか、答えは現場にあると信じ、アウトブレイクが続く今も活動を行っています。



コミュニティの活動を担うCommunity Based Volunteerにアドバイスする法月チーフアドバイザー



雨期で洪水となるコンパウンドをJICAプロジェクトで経口補水液を地域に配るポイントに向かう

### ■ 感染症対策のためのラボサーベイランス強化プロジェクト

/今村忠嗣チーフアドバイザー

私たちのプロジェクトでは、ザンビア国立公衆衛生研究所(ZNPHI)、特にその下部組織であるレファレンス・ラボラトリー(ZNPHRL)を対象として、①病原体検出および分析能力の向上、②ラボマネジメント能力の強化、③ステーキホルダーとのネットワーク強化を3本柱とした技術支援を行っています。ZNPHRL内だけでなく、検体採取が行われるコミュニティの医療施設など、様々な場所で活動を行っています。プロジェクトでは、検査・ラボの安全/質管理・疫学分野で技術支援を行っています。コレラアウトブレイク以前から構築してきた検査

体制を用いて、コレラの検査室診断や薬剤感受性に関する情報をZNPHIや保健省に提供しています(写真1)。また、コレラ流行初期には、ラボマネジメントチームが流行の中心地の臨床検査室を訪問し、検査技師の安全と検体の質を確保するための便検体の取り扱いやラボ運営に関して技術提供を行いました(写真2)。その他、ZNPHI疫学チームに対し、患者情報の収集やデータ解析に関する技術支援も行っています。ザンビア側カウンターパートとともに質の高い感染症対策を実施すべく、奮闘する日々です。



ZNPHRLで便培養検査を行う検査技師ら



市中病院の臨床検査室で技術指導を行うラボマネジメントチーム

## 保健グループ What's Up (2023年11月～2024年1月)

### 最近の保健グループス関連の動きを掲載します！

#### 【技術協力】

- ミクロネシア 大洋州地域強靱な保健システム構築のための連携強化プロジェクト(2023年11月8日、専門家派遣開始)
- 5S-KAIZEN-TQM を通じた保健医療サービスの質向上のアフリカ地域広域展開促進(2024年1月、案件開始)
- ラオス 持続可能な保健人材開発・質保証制度整備プロジェクト(2023年12月22日、案件終了)
- ラオス 看護師・助産師継続教育制度整備プロジェクト(2024年1月29日、専門家派遣開始)
- タイ グローバルヘルスとユニバーサルヘルスカバレッジのためのパートナーシッププロジェクトフェーズ2(2023年12月10日、案件終了)
- タイ 細胞培養ワクチン製造能力強化プロジェクト(2023年1月5日 R/D締結)



ゆくひと

くるひと



短い期間ですがお世話になりました。「クラスター事業戦略」をはじめとして様々な立場の関係者との共創に向けた取り組みが加速してゆくなか、編集作業を通じて各国の活動を知ることが出来、勉強させて頂きました。今後も「保健だより」が途上国での保健事業に関わる方々の情報発信の場として使われてゆくことを祈念しております！

(前保健3T 杉山裕隆)

この度、広報タスクを離れることになりました。多くの方に保健だよりをご覧いただき、幅広い保健課題や協力の潮流など知り・関心をもっていただける機会を提供できていたのであれば、嬉しいです。今後の保健だよりにも是非注目していただきたいです！ありがとうございました。

(保健3T 増澤真麗)



### 編集後記

保健だより64号をご覧いただきありがとうございました。今月号はグローバルヘルス合同大会2023の中から、JICAが登壇した3つのトピックを中心に取り上げさせていただきました。今後もJICAプロジェクトの紹介にとどまらず、国際潮流の動向もチェックし、皆さんにお伝えできたらと思います。

今回も、記事執筆にあたり多くの方にご協力いただけましたこと、編集チームを代表して感謝申し上げます。次号の保健だよりもお楽しみに！

(保健第一チーム 島)



保健だよりで取り上げてほしい特集テーマを募集します！

人間開発部 [kadaishien-ningen@jica.go.jp](mailto:kadaishien-ningen@jica.go.jp)

までお寄せください！

ご意見ご感想もお待ちしております！